

ハイリスク児の多面的発達フォローの効果

(分担研究：ハイリスク児の地域ケアのあり方に関する研究)

分担研究者	中江陽一郎		
共同研究者	前川 喜平	庄司 順一	奥平 洋子
	小田切房子	星 永	秦野 悦子
	瀬戸 淳子	星 三和子	栗山 容子
	若葉 容子	嶋崎るり子	

目 的

小児の発達は多面的であり、医師または心理のみでは小児の発達のすべてを知ることは不可能である。我々はハイリスク児において少数例であっても、多方面より綿密にフォローアップし、その発達の特徴を明らかにしその結果を基にして少産時代の小児の家庭支援に役立てることを目的として本研究を行った。

研究方法

慈恵医大で出生し、退院時明らかな脳障害を認めない低出生体重児を対象とした。コントロールとして同期間に慈恵医大で出生した満期ローリスク児とした。

研究方法は、児については神経学的診察、発達検査・知能検査、言語能力質問紙、気質質問紙、行動観察（遊び）などであり、親については、母性感情・育児態度・家庭環境に関する質問紙、面接、行動観察（母子関係）などを検査した。また出生後の諸変数（母子関係や養育態度など）には妊娠期の状況が影響している可能性もあるので、妊娠期からフォローすることと

した。また、従来は母子関係が重視されてきたが、育児における父親の役割も重要であると考えられるので、父親についての資料も収集した。

これらの小児について、生後1ヵ月、4ヵ月、7ヵ月、12ヵ月、1歳6ヵ月、2歳、2歳6ヵ月、3歳、4歳、5歳にチェックを行う。

結 果

現在フォローを行っているハイリスク児並みにコントロールを表1にまとめた。現時点では身体発育に問題があるものが1例存在するが、発達は全例正常範囲である。今回は多方面フォローの効果についてのみ記載する。

1.早産児は1ヵ月、4ヵ月診察時迄はコントロールに比較して発達に差があることが多いが、7ヵ月頃より追いつき始め、お誕生を過ぎると身体発育以外は差が無くなってしまった。

2.育児上、問題がある母親は3名存在したが、回を重ねる毎に養育態度が好ましい方向に変わり、それに連れて子供の発達も正常となってきた。

我々の方法は、最初面接で子供の日常生活、親の心配している問題、児の発達などについて話

を聞き相談し、その後時間をかけて心理、または言語専門家がsymbolic playを行い、親子関係、子供の発達を多方面よりチェックした。その後、小児科的診察、栄養相談などがあり、毎回1時間半を1人に費やしている。

結 語

医師以外の多職種の人の接触により、親の心配、疑問が解消し、養育態度が改善され、それが児の発達をより好ましい方向に持っていくものと考えられる。

我々の方法も早期interventionの1つとも考えられる。

表1 リスク群

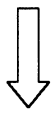
NO.	名前	性	生年月日	在胎週数	出生体重(g)	入院日数	1カ月	3カ月	7カ月	12カ月	18カ月	24カ月
1	A. K.	F	3. 7. 14	35W2D	1208	71	○	○	○	○	○	
2	H. M.	M	3. 10. 11	34W2D	1458	69	○	○	○	○		
3	M. N.	M	3. 5. 14	34W2D	1534	53	○	○	○	○	○	
4	J. K.	M	3. 4. 16	36W3D	1592	53	○	○	○	○	○	
5	S. K.	M	2. 12. 26	34W0D	1856	52	○	○	○	○	○	○
6	T. M.	M	3. 7. 23	35W0D	1880	40	○	○	○	○		
7	K. M.	F	3. 7. 23	35W0D	1898	40	○	○	○	○		
8	S. M.	F	3. 3. 28	30W5D	1282	130	○	○	○	○	○	

表2 コントロール群

NO.	名前	性	生年月日	在胎週数	出生体重(g)	入院日数	1カ月	3カ月	7カ月	12カ月	18カ月	24カ月
1	T. T.	M	3. 10. 18	38W1D	2606	7	○	○	○	○	○	
2	C. M.	F	3. 8. 6	38W2D	2660	8	○	○	○	○	○	
3	K. H.	F	3. 9. 24	39W0D	3230	7	○	○	○	○	○	
4	M. T.	F	3. 8. 7	39W0D	3286	7	○	○	○	○	○	
5	N. W.	M	3. 10. 20	38W4D	3322	24	○	○	○	○		
6	A. O.	F	3. 9. 27	41W0D	3388	7	○	○	○	○	○	
7	M. I.	F	3. 7. 19	37W0D	3744	7	○	○	○	○	○	
8	T. K.	F	3. 10. 17	40W2D	2622	7	○	○	○	○	○	
9	H. T.	M	3. 10. 22	39W0D	3490	14	○	○	○	○	○	



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



目的

小児の発達が多面的であり、医師または心理のみでは小児の発達のすべてを知ることは不可能である。我々はハイリスク児において少数例であっても、多方面より綿密にフォローアップし、その発達の特徴を明らかにしその結果を基にして少産時代の小児の家庭支援に役立てることを目的として本研究を行った。